

東日本大震災から半年：宮城の津波被災現場のいま

社団法人 J C 総研 客員研究員 和泉 真理

3月11日の東日本大震災の発生から、半年がたった。震災に関するニュースは原発や復興計画にシフトしているが、津波による甚大な被害を受けた東北の沿岸地域は今どのような状況にあるのか。9月初旬に、宮城県の被災地をまわる機会を得たので、半年後の津波の被災地の様子を報告したい。

1. 名取市閑上地区

最初に訪れたのは、仙台市の南側に隣接する名取市閑上地区^{ゆりあげ}である。震災直後、押し寄せる津波がこの地区のハウスや水田を潰しつつ押し寄せるライブ映像はまだ記憶に鮮明に残る。

仙台東部道路の東側に出ると、広大な緑の草原が広がっている。一面茶色の草原も多い。所々にまだ船や自動車が置き去りになっているのが見える。もとは水田地帯だった所であり、セリの産地でもある。草に隠れているが、農地にはまだまだがれきが残っているという。一面茶色の農地は、草が伸びてしまったので除草剤をかけたからである。案内して下さった女性農業者によれば、名取市では市街地のがれきの撤去が優先され、農地のがれき除去のボランティアを入れなかったこともあり、がれきの撤去が遅れているとのこと。現在農家で復興組合をつくり、国の助成を得ながらがれきの除去を進めているようだ。がれきの除去に重機を入れると耕盤が壊れるから手で除去するしかない。しかし、特に海岸に近い所では、遺体捜索のために重機が入ったので、すでに耕盤は壊されてしまったという。また、灌排水施設が破壊されたので、津波被害の及ばなかった地域でも、その先の排水施設が壊れたため作物を作れない所もある。

名取川河口、以前古い家屋がひしめき合っていた集落のあった所は、土台以外は何ひとつ残っていなかった。そのなかに、高さ10mほどの日和山という小さな丘があり上に神社が建っている。津波はこの丘をも覆いかぶさった。丘の

上にあった石碑が麓まで転がり落ちていたが、そこには江戸時代の津波の被害の記録と教訓が書かれていたようで、象徴的な光景だった。少し離れた新しい住宅地では、真新しい住宅が津波に1階部分が破壊された姿で並んでいる。壊れた所を修理しても、汚泥の臭いが残っており、なかなか住めないそうだ。

より海岸に近い仙台空港の東側は、カーネーションなどのハウスが集まっていた地区だが、ハウスは跡形もなく、草むらに倒木がごろごろしている。この震災により地盤が下がったため、海岸に近い所では、水がたまっている。

元の農地にするには、まずがれきを撤去し、表土を除去し、灌排水施設を修理し、水を流して塩分を流し・・・長い道のりである。

写真1：名取市閑上地区の水田だった所。地盤が沈下し、水が溜まっている。

除草剤を撒いたので、一面茶色の草むらである。



名取市では、現在震災後の農業の復興計画を策定中で、担当者は「新しい農業を目指す」と語っていた。その内容について、女性農業者は、「個人経営主体から法人化」「水稻だけに頼らない農業」とその構想の一端を説明してくれた。これについて、保守的考えと新しい考えとで意見の相違があるが、仙台市近郊の豊かな農業・農地を次世代に継承するために前向きに考えていきたいと語っ

てくれた。

写真2：名取市閑上地区の名取川河口の古い集落のあった所。

土台以外は何も残っていない。



写真3：名取市の仙台空港近くの海岸付近の様子。ここにはハウス団地があった。



2. 南三陸町志津川地区

南三陸町の旧志津川の海岸地区は津波で町が壊滅、9月6日時点で死者 551名、不明者 437名の甚大な人的被害を被った。

町に入ると、がれきは雑草で見えにくくなったというもののまだかなり残り、廃墟となった病院、学校などの建物が並ぶ。鉄骨だけ残った町の防災対策庁舎の前で、役場の方から話を伺った。この防災対策庁舎の上に逃げた大勢の人たちに津波が襲いかかるのが向かいの丘から見えたという。つい4〜5日前も同僚の遺体が海から揚がったそうだ。遺体が見つからない遺族にとっては、心の整理もままならない。早く遺体が見つかってほしいという。高台の中学校の校庭には仮設住宅が立ち、海岸の崖上にあるホテルに避難していた人たちは多い時で800人いたが、8月末で全員出たところだそうだ。案内してくれた役場の方も農家レストランを営んでいた女性も、仮設住宅やお寺などの仮住まいである。

写真4：南三陸町の防災対策庁舎付近。



このような状況で、町の復興計画はこれからだ。しかし津波の来る海岸に面した地区は住宅地にはしない可能性が高そうだ。そうなると、山を削って住宅地を造成することになるが、それを待つ人達の住む仮設住宅には2年しか住め

ないことになっており、間に合わないのではとの懸念もある。

壊滅した役場に替わり、現在役場は海岸から山に入った高台の総合運動場のグラウンドに仮設されている。ボランティアセンターや仮設住宅もあり、道路際にはボランティアの人たちのテントが並ぶ。仮設の郵便局や商店もいくつか見られた。

ヤマウチ商店は8月10日に、この仮設の役場近くに仮設店舗を開店した。もともと海岸近くで地元産にこだわった水産物や水産加工品を製造販売していたが、津波で2つの店舗も倉庫もすべて失った。震災後2カ月ほどは、被災者への支援などでとても商売を再開する状態ではなかったが、町の「福興市」をきっかけに、従業員達もやろうと言ってくれ、仮設店舗開店にこぎ着けた、という。「福興市」は、月1回、役場の仮庁舎近くで開かれており、南三陸町の企業や全国からの支援団体など50を超える店が並ぶ。この場にとにかく店を出すことが、また商売をしよう、と踏み出すきっかけになるそう。もともと「魚屋」であるヤマウチ商店だが、仮設店舗では野菜も肉も売り、小さな食堂もある。同じく被災し店を失った寿司屋の夫婦が、この食堂で寿司をにぎっている。仮設住宅などに移り散り散りになった住民が、この店で再会して無事を確認し合う場所にもなっている。

写真5：南三陸町のヤマウチ商店の仮設店舗



ヤマウチ商店の仕入れ先である地元の漁業は、津波で養殖施設が壊滅した。養殖の牡蠣やホヤが育つにはこれから2～3年かかる。漁船は多少残ったが、海岸の水揚げ施設が壊滅したため、現在は仮の荷さばき施設を使って水揚げを行っている。ここは秋ザケの水揚げ港であり、時期である9月中旬までになんとか水揚げの体制ができてほしいとヤマウチ商店の従業員は話していた。

写真6：南三陸町の魚市場。津波で破壊されたが、その一面をビニールなどで覆い、仮の水揚げ場としている。



3. 「忘れないで」「お金よりも心」

宮城県のみならず内陸地域の女性農業者の話も聞いた。繁殖牛と飼料米を生産する女性農業者は、何よりも震災後に飼料が入手できなかったのが大変だったという。九州などからなんとか調達したが、運賃など上乗せ分の負担が重くのしかかった。また、停電により給水施設が止まり、家族で川から水をくんで牛舎に運んだそうだ。震災後、悲観的なことばかり考えるようになり、息子に農業を継がせていいのか迷うようになったと言う。

もう1人、やはり繁殖牛経営の女性農業者も、やはり飼料の調達が一番大変

だったという。他方、コメや野菜を持ち、大きな冷凍庫に肉を保管している自宅は、震災後小さな避難所のようになり、「農家って強いな」とも感じたそうだ。

兩名とも、今被災地の外からほしいのは、「応援しているよ」という気持ちであり、「忘れないで」ということだという。同じせりふを、閑上の現場を訪れた時、秋田県東成瀬村の視察団を案内していた名取市の職員からも聞いた。東成瀬村は、被災した名取市民約 400 名を、20 日間温泉に無料で受け入れてくれたそうだ。それに対する深い感謝を込め、「お金はいくらあっても足りないが、それよりも心」と語ってくれた。

4. 宮城県の被災現場を見て

最後に、石巻市の漁港に立ち寄った。石巻市は宮城県で仙台市に次ぐ都市であり、震災による死者、行方不明者は合わせて 4,000 人近くに達している。

海岸に近い地区に近づくと、建物がたくさん建っているが、住宅はどれも 1 階部分が壁だけ、工場は廃虚のままである。がれきや壊れた自動車が大量に集められているが、今後これをどう処理するのが課題だ。石巻漁港や岸壁に並ぶ水産物の倉庫なども廃虚のような様相である。

写真 7：石巻市の漁港近くの津波で破壊された工場。



東日本大震災については、「復興」の段階という先入観で宮城県の現場に入ったが、実際にはまだまだ「復旧」「後片付け」の状態だ、ということを知り、改めて認識した。まだ行方不明者も多く、現地では避難場所や仮設住宅での生活が続く。がれきはかなり片付いたといっても、道路上にないだけのことであり、集めたがれきの処理、広大な農地のがれきの除去が徐々に進められている。農地を農地として使い作物を収穫する、養殖施設を復旧させそこで水産物を収穫するまでには、さらに数年かかる。

一方、このような状況のなかでも、被災地で会った人達は、地域や農業の再生へと、前向きに動き始めている。非常に力づけられた。

東日本大震災から半年という節目を期に誌上での地震の扱いは一時的に増えたものの、被災地以外では震災についての関心は減り、しかももっぱら原発関連に向かっている。これから数年をかけて復興を目指す被災地の地域・農林水産業について、具体的な支援も大切だが、何よりも現状を意識し現場を激励し続けることが私たちの役割であろう。

(2011年10月)